

## タイ・サンカンペン温泉における温泉観光開発

### The Development of Spa Tourism in Sankamphaeng, Thailand

浦 達雄<sup>\*</sup>、小堀貴亮<sup>\*</sup>、中山三照<sup>\*\*</sup>、ポーパンティップ<sup>\*\*</sup>

Tatsuo URA, Takaaki KOBORI, Mitsuteru NAKAYAMA, Jariwat PHOLPHANTIP

キーワード：タイ (Thailand)・サンカンペン (Sankamphaeng)・開発 (Development)・温泉観光 (Spa tourism)・経営動向 (Business trends)

#### 1 はじめに

##### (1) 研究の背景

タイには200以上の温泉地が成立している(図1)。主な温泉地は、タイの北部(チェンマイ周辺)・バンコク周辺・タイの南部(マレー半島)に展開している。タイにおける温泉地の成立・発展の詳細は定かではないが、カンチャナブリー県のヒンダット温泉のように日本軍が開発した温泉施設が現在でも有効利用されており、その歴史は第2次世界大戦前までさかのぼることが出来よう(浦達雄他 2011)。さらに、温泉を付帯する寺院も散見される。カンチャナブリー東郊のワンカナイ寺では温泉施設を無料で開放し、利用客が多い。

タイ北部に位置するチェンマイ周辺は、タイにおける温泉集中地区を形成している。温泉は熱帯の気候ではなじまないと思われがちだが、東南アジアで日本軍が開発した温泉として、パプアニューギニアのラバウル、マレーシアのポーリン温泉などが知られる(浦達雄 2009)。タイは熱帯の国だが、北部に位置するチェンマイ付近は、冬の気候は冷涼となり、温泉利用の環境が整っていることも、温泉施設の増加につながっていると思われる。

本稿では、チェンマイ周辺を調査地域に設定した。その理由としては、チェンマイ周辺がタイにおける温泉集中地区であること、新旧の温泉施設が多いことなどである。特にチェンマイ東郊のサンカンペン温泉は、温泉施設が集積しており、調査地域としては好例と判断し、野外観察や聞き取り調査などの現地調査を実施した。

##### (2) 従来の研究成果

タイにおける温泉観光開発に関する論文は、観光地理学の分野では見当たらない。普及書としては、高橋由紀夫(2008)『秘湯天国タイだもーん』がある。本書はタイにおける温泉施設

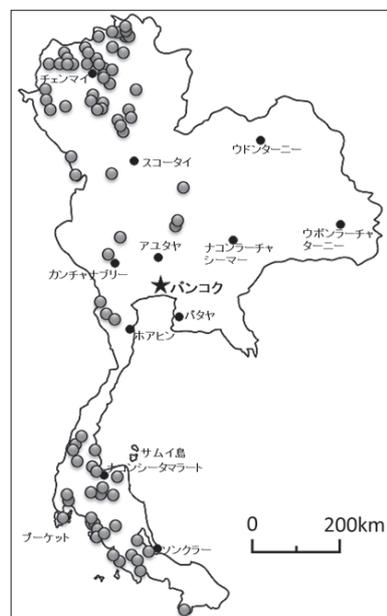


図1 タイにおける温泉地の分布  
(注) 高橋(2008)により小堀貴亮作成。

<sup>\*</sup>大阪観光大学(Osaka University of Tourism) <sup>\*\*</sup>ラチャプリユックカレッジ(Ratchapruerk College)

の旅行記・概説書であり、旅行者や温泉マニアの立場では、利用価値が高い。機関誌をみると、若干の成果が見られる。松下正弘（2001）は、タイ（主にタイ北部）における温泉の概要をレポートしており、いまとなつては先駆的な内容と言えよう。

浦達雄他（2011）は、カンチャナブリー県における2ヵ所の温泉施設を調査した成果であり、現地における聞き取り調査をもとに経営動向の概況を報告した。浦達雄（2011）では、サンカンペーン温泉を取り上げ、旅行記風にまとめている。

なお、地質調査所（1987）「タイ北部における温泉地の分布」は、タイ北部の温泉について、温度別に分布状況を図示しており、研究・調査の初期の段階では、参考になる点が多い。

### （3）研究の目的と方法

研究の目的は、温泉の集中地区であるタイ北部、中でもチェンマイ県のサンカンペーン温泉を事例として、温泉施設の経営実態を明確にすることである。研究の方法は文献調査、現地での聞き取り調査である。経営数値を中心に聞き取り調査を実施したが、不明な部分もあり、その概要の把握に努めた。

## 2 サンカンペーン温泉の概要

### （1）タイ北部における温泉の展開

タイの北部は、タイにおける温泉3大集中地区の1つである。中でも、チェンマイを中心として温泉施設が点在し、県別では、チェンマイはもちろんのこと、チェンライ・パヤオ・メーホンソーン・ランバンなどに立地し、主に山岳地帯に温泉施設が見られる（図2）。泉温は高温泉の多いのが特色で、泉質は硫黄系が目立っている。

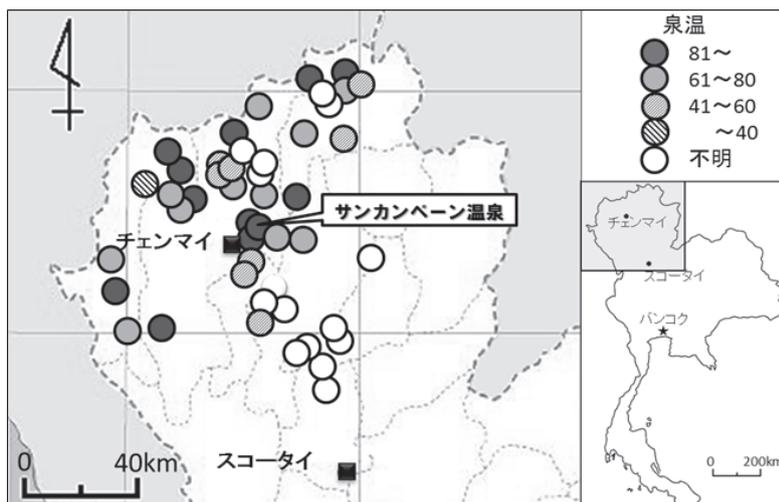


図2 タイ北部地域における温泉地の泉温別分布  
（注）各種資料により小堀貴亮作成。

### （2）サンカンペーン温泉における温泉施設の分布

サンカンペーン温泉は、タイ北部の中心都市であるチェンマイから東へ40kmの付近に位置する（図3）。地勢的には山野が主体で、いわゆるルーラルな地域を形成している。こうした自然環境の中で新旧の温泉施設が点在し、いわゆる温泉集落は形成をしていない。

表1は、サンカンペーン温泉における4軒の温泉施設の概要を整理したものである。聞き取り調査をもとに作成した。その結果、1980年代に開発されたリゾートタイプと、2010年前後に登場した宿泊特化型のタイプがあることが判明した。図4は、温泉施設の分布状況を示したものである。

具体的には、リゾートタイプとして、①サンカンペーン公営温泉、②ルンアルン温泉、宿泊特化型のタイプとして、①ONSEN、②ブリラサイがある。以下、温泉施設ごとに、その概要と経営の実態などを述べることにしたい。



図3 サンカンペーン温泉の位置  
(注) 各種資料により小堀貴亮作成。

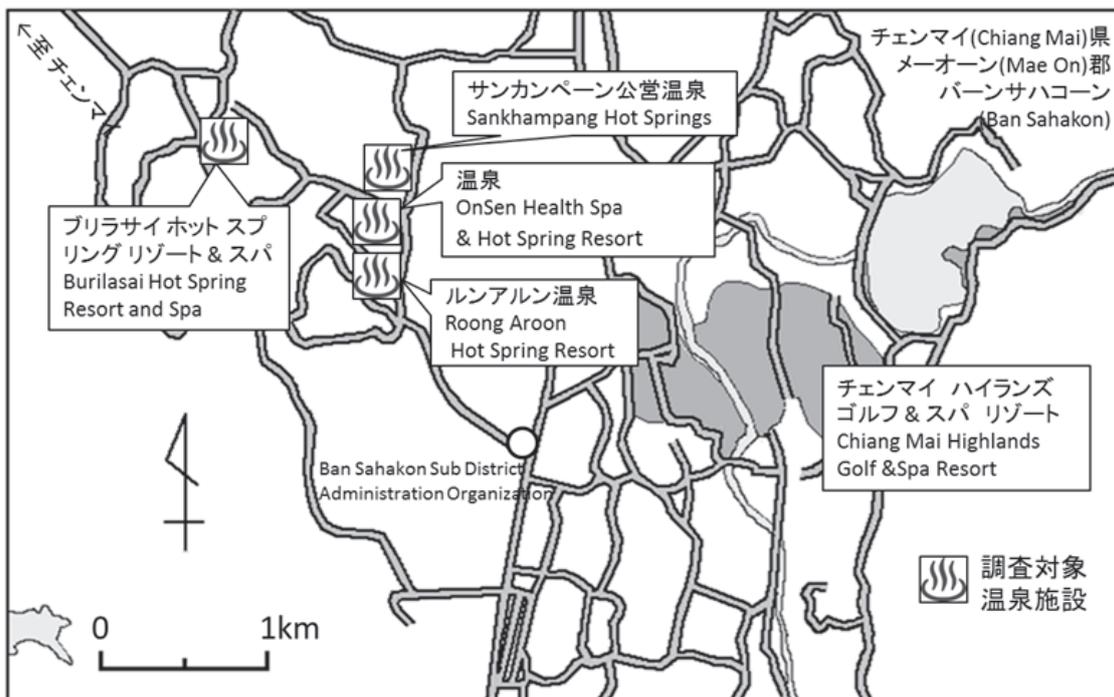


図4 サンカンペーン温泉における温泉施設の分布 (2011年)  
(注) 各種資料および現地調査により小堀貴亮作成。

### 3 サンカンペーン公営温泉

#### (1) 開発の概要

公営温泉の経営母体は村落農業共同体となる。地方政府と8の村落が共同出資をして経営を行なっている。開業は1984年12月22日で、開業動機は荒地を活用した観光振興となる。温泉施設の敷地面積は75 R A I (12ha)で、設備投資額(土地・建物)は200万B(地方政府100万B、村100万B)である。ちなみに、1バーツ(ここではBと表示)は2.5円(2011

表1 サンカンペーン温泉における温泉施設の実態（2011年）

	公営温泉	ルンアルン	ONSEN	プリラサイ
開業年 初代経営者	1984年12月22日 村落農業共同体	1987年 バンコク 潮州系 薬剤士・製薬会社経営	2009年2月 サンカンペーン郡	2010年1月1日 ピチット県 潮州系 建築業 土地があったから
開業時の職業 開業動機 投資額（土地） 投資額（建物）	地方政府・8の村落 観光振興（荒地地を活用） 200万B（地方政府100 万B、村100万B）		住宅開発・販売 リゾートの建設 5,000万B（森林） 6,000万B アラブ・バリ島・日本をイメージ	1,000万B（森林） 1,000万B
敷地面積	75RAI	100RAI	13RAI	38RAI
温泉掘削年 深度 泉温 湧出量 源泉数 泉質	1984年 100m 105℃ 3本 硫黄系 フッ素、臭素を含む	1976年10月19日 40m 105℃ 240リットル/m 2本 硫黄系 カルシウム、マグネシウムを含む	2005年 3本 硫黄系	2009年 60m 70℃ 3本 硫黄系
入場料金 温泉施設 同料金 宿泊施設 同料金	20B 足湯、プール、男女別個 室浴場など 個室浴場50B、貸切(200B) プール150B、シャワー20B コテージ17棟 普通棟：1,200B VIP棟：2,500B	20B 大浴場(水着着用)、プー ル、男女別個室浴場など 個室浴場80B、120B コテージ(4室付帯)4棟 コテージ(2室付帯)10棟 コテージ(5人収容)2棟 平日：1,200B 週末：1,500B	なし プール、男女別個室浴場 (それぞれ10室) 300B 10室 2,500B	なし プール、個室浴場(4室) 150B コテージ大5棟 コテージ小5棟 大：2,200B 小：1,500B
年商 成長率 オン オフ	2,500万B 1・12月 8・9月		100万B～200万B 11～2月 4～6月	1,000万B 20%/年アップ 10～3月 6～9月(雨季)
顧客 従業員数	アラビア・日・韓・中など 外国人は20% 50人		日(40%)・タイ(30%)・韓・ 米・英・露など ゴルフ、セミナー、ロングステイ など 8～15人	米・日・韓・中・タイ(他の県) 12～20人
その他	源泉で温泉卵可能 売店の家賃は1,500B/月 年間40万人利用 学生の利用が多い 源泉湧出の見学が出来る 1972年頃、タイ政府が地 熱開発を試みたが資金不 足で断念	源泉で温泉卵可能 2008年、温泉水を利用し た化粧品などを開発 源泉湧出の見学が出来る 利用客は、オフで30人/日、 オンで70～100人/日 屋号の意味は明るい夜明 け	初代女将は食物アレルギー で2011年死去。 オックスフォード大出身 日本好きで屋号は温泉とす る 初代の夫は農園(タバコ)経営 2代目の夫は農園(ゴム)経営 チェンライで1,000RAI所有 2代目女将は26歳 2012年にサウナ開設 年間1万人利用	土地は1990年頃買収 ルンアルンの建設の際、建築 を手伝う 初代は農園(フルーツ類)経営 2代目(31歳)は建築業(バン コク) 温泉は飲泉可能 別に3RAIの土地所有 (1,800B) 屋号の意味は素晴らしい町 マッサージルーム建設中 水田付帯 隣で韓国の保養施設建設中

- 注1. 聞き取り調査により浦達雄作成。ただし、ルンアルンは責任者不在。  
 注2. 数値は推定値。B=バーツ。1B=約2.5円。  
 注3. 1RAIは1,600㎡。  
 注4. 料金はタイ人の利用料金。  
 注5. 空欄は未調査。

年8月現在)を示す。1972年頃、タイ政府が地熱開発を試みたが、資金不足で断念した場所として知られる。

## (2) 温泉・宿泊施設関係

温泉掘削は1984年に行い、掘削の投資額は不明である。源泉の深度は100mを数え、源泉数は3本を数える。泉温は105℃で、湧出量は不明である。観察によれば、掘削自噴泉はかなりの量を空中に吹き上げている(写真1)。泉質は硫黄系で、フッ素・臭素が含まれている。

公営温泉への入場料金は大人20Bで、主な温泉施設として足湯・プール・男女別個室浴場などがある。同料金は個室浴場50B・貸切200B・プール150B・シャワー20Bとなる。宿泊施設はコテージで17棟を数える。同料金は普通棟1,200B・VIP棟2,500Bとなる。



写真1 源泉湧出の様子(公営温泉)

## (3) 経営数値

年商は2,500万Bを数える。年商からみたシーズンはオンが1・12月、オフが8・9月を示す。市場(顧客)はタイ・アラビア・日本・韓国・中国などで、外国人の利用は20%程度で、タイ人は学生の利用が多い(写真2)。年間の利用客は40万人に達している。スタッフ50人程度となる。



写真2 温泉で水遊びをする子供たち(公営温泉)

## (4) その他

源泉では、温泉卵が可能で、売店では生卵が売られている。施設内では数多くの売店が出店しており、村人が事業主として経営に参画している。その際の売店の家賃は1,500B/月を数える。施設内は広大な公園として整備されており、源泉湧出の見学が出来る。

# 4 ルンアルン温泉

## (1) 開発の概要

経営者(女性)はバンコクの出身で、潮州系となる。本業は製薬会社経営で、経営者は薬剤師の資格を持つ。開業は1987年で、開業動機は不明(経営者不在で聞き取れず)。敷地面積は100RAI(16ha)と広い。設備投資額(土地・建物)はやはり不明。

## (2) 温泉・宿泊施設関係

温泉掘削は1976年10月19日に行った。掘削の投資額は不明である。源泉の深度は40mで、泉温は105℃と高温である。湧出量は240ℓ/m、泉質は硫黄系で、カルシウム・マグネシウムを含んでいる。施設の入場料金は大人20Bで、



写真3 室内プール(ルンアルン温泉)

温泉施設として大浴場（水着着用）・プール（写真3）・男女別個室浴場などがある。同料金は個室浴場 80 B・120 Bとなる。宿泊施設としてはコテージ（4室付帯）4棟・コテージ（2室付帯）10棟・コテージ（5人収容）2棟などがあり、同料金は平日 1,200 B、週末 1,500 Bとなる。

### （3）経営数値

経営数値は経営者不在で、調査は出来なかった。ただし、利用者数は、オフシーズンで 30 人/日、オンシーズンで 70～100 人/日を数える。スタッフは 50 人程度となる。

### （4）その他

源泉は掘削自噴泉が湧出しており、見学が出来る（写真4）。売店では生卵が売られ、温泉卵が可能である。2008 年からは温泉水を利用した化粧水などを開発し、新事業に取り組んでおり、化粧水などが売店で販売されている。屋号の意味は明るい夜明けとなる。



写真4 源泉湧出の様子（ルンアルン温泉）

## 5 ONSEN

### （1）開発の概要

初代経営者（女性）はサンカンペン郡の出身で、住宅開発や販売を手広く行っていた。開業は 2009 年 2 月で、開業動機は温泉リゾートの建設となる（写真5）。敷地面積は 13 R A I（2.1ha）で、設備投資額（土地）は 5,000 万 B（森林）、同（建物）は 6,000 万 B を数える。

### （2）温泉・宿泊施設関係

温泉の掘削は 2005 年で、掘削の投資額・深度・泉温・湧出量などは資料不足で不明である。泉質は硫黄系となる。宿泊特化のため、入場料金は無い。温泉施設として、プール・男女別個室浴場（各 10 室）（写真6）がある。同料金は 300 B を数える。宿泊施設はホテルタイプで 10 室、同料金は 2,500 B を示す。

### （3）経営数値

年商は 100 万 B～200 万 B を数える。シーズンはオンが 11～2 月、オフが 4～6 月で、市場（顧客）は日本（40%）・タイ（30%）・韓国・米国・英国・露などとなる。年間の利用者は約 1 万人である。利用目的はゴルフ・セミナー・ロングステイなどが多い。スタッフは 8～15 人程度を数える。



写真5 玄関先（ONSEN）



写真6 個室浴場（ONSEN）

#### (4) その他

初代経営者（女将）は食物アレルギーで2011年7月に死去した。女将はオックスフォード大の出身で、日本には何度も訪問し、日本好きで屋号はONSEN（温泉）と命名した。したがって、施設内には日本（浮世絵など）・バリ島・アラブを意識した掲示物や展示物などが多い。2012年にはサウナを開設する予定である。現在、2代目女将が経営をするが、25歳と若い。初代の夫は農園（タバコ）経営、2代目の夫は農園（ゴム）経営となる。チェンライで土地を1,000 R A I（160ha）所有している。

### 6 ブリラサイ

#### (1) 開発の概要

経営者はタイ中部のピチット県出身で、潮州系となる。建築業から温泉事業に参入をした。開業は2010年1月1日で、開業動機は1990年頃に買収した土地があったからである。ルンア温泉の建設の際に、建築を手伝った関係で、土地を購入したのである。

敷地面積は38 R A I（6.1ha）で、設備投資額（土地）は1,000万B（森林）、同（建物）は1,000万Bを数える。

#### (2) 温泉・宿泊施設関係

温泉掘削は2009年で、掘削の投資額は不明である（経営者不在のため）。源泉の深度は60mで、泉温は70℃に達する。湧出量は不明で、泉質は硫黄系だが、温泉は飲泉可能である。宿泊が主体なため、入場料金は発生しない。温泉施設はプール（写真7）・個室浴場（4室）となる。同料金は150Bを数える。宿泊施設は、コテージ大5棟、小5棟からなる（写真8）。同料金は大2,200B、小1,500Bを示す。



写真7 屋外プール（ブリラサイ）

#### (3) 経営数値

年商は1,000万Bを数え、対前年比は20%アップを示す。シーズンはオンが10～3月、オフが6～9月を示し、雨季がシーズンオフとなる。市場（顧客）は米国・日本・韓国・中国・タイ（他の県）などとなる。スタッフは12～20人程度を数える。

#### (4) その他

初代経営者は、現在、農園（フルーツ類）を営み、2代目主人は（31歳）は建築業をバンコクで行なっている。近くで別の土地を3 R A I（0.48ha）ほど所有し、出来れば1,800Bで売却したいとのことである。敷地内では、現在、マッサージルームを建設している。付帯施設として水田を設け、生産された米はレストランでの食事の際に提供している。屋号の意味は素晴らしい町を意味する。



写真8 コテージ（ブリラサイ）

## 7 むすび

以上、タイ北部・サンカンペーン温泉における4軒の温泉施設を事例として、その開発の実態と経営状況の概要を把握したが、その結果、次のことが明確になった。

- ①温泉施設の敷地は広大である。
- ②敷地内には温泉施設と宿泊施設が立地する。
- ③宿泊施設はコテージタイプが中心である。
- ④温泉施設はプールと男女別の個室浴場（バスタブ）が主体で、日本風の露天風呂・家族風呂は少ない。
- ⑤温泉は自家源泉、高温で湧出量が多い。泉質は硫黄系となる。
- ⑥経営者のタイプは様々だが、今回調査した4施設の内、2施設が潮州系で、事業意欲に長けている。
- ⑦年商など経営数値は好調で、毎年20%アップの温泉施設もあった。
- ⑧シーズン（季節性）は乾季と冬季がオンシーズンで、雨季がオフシーズンとなる。
- ⑨利用者の中にはチェンマイでロングステイをする日本人も多い。
- ⑩今後の課題として、温泉施設の継続的な調査を行うことで、タイにおける温泉地の一般的な傾向の把握、出来れば、入湯客に対するインタビュー調査などを実施したい。

## 付記

本稿は、日本温泉地域学会第18回研究発表大会（2011年11月6日・浅虫温泉）で口頭発表した内容を修正・加筆したものである。なお、本研究は、大阪観光大学とタイ・ラチャブリユックカレッジとの「研究及び教育上必要とする分野での交流に関する覚書」による共同研究（テーマは「タイにおける温泉観光開発」）の研究成果の一部である。

ところで、本稿は、以下の論文を再掲したものである。温泉地域研究では、紙面の都合、図などがカットされたため、ここでは、投稿した全文と写真を掲載するものである。

浦達雄・小堀貴亮他（2012）「タイ・サンカンペーン温泉における温泉観光開発」温泉地域研究・第18号、25～30頁。

## 謝辞

現地での聞き取り調査に当たり、各温泉施設の担当者、ガイド兼通訳のパンティラー シン タイポップ氏に大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

## 参考文献（発行順）

- 地質調査所（1987）「タイ北部における温泉地の分布」同所、1枚。
- 松下正弘（2001）「タイの温泉（ナムローン）」温泉（日本温泉協会）・第69巻4号（通巻749号）（2001年4・5月合併号、26～29頁）。
- 高橋由紀夫（2008）『秘湯天国タイだもーん』 ぬる文社、190頁。
- 浦達雄（2009）「湯遍路旅日記ーアジア・太平洋編ー」観光&ツーリズム（大阪観光大学観光学研究所・所報）・第14号、12～23頁。
- 浦達雄他（2011）「タイ・カンチャナブリーの温泉」温泉（日本温泉協会）・第79巻1号（通巻840号）（2011年1月号）、3～5頁。

浦達雄（2011）「U R Aの湯遍路旅日記2010 -台湾・中国・タイに行く-」観光&ツーリズム  
（大阪観光大学観光学研究所・所報）・第16号、11～23頁。

浦達雄（2012）「U R Aの湯遍路旅日記2011—中国・タイに行く-」今日新聞・正月号、見開  
き2頁。